

困難な状況にある生徒たちを支えるキャリア教育は どうあるべきか

— 一人の女性の事例に基づく考察 —

梶 島 真沙美*、藤 田 武 志**

What programs of career education should be provided to support students in difficult situations? :
A Study Based on a Woman's Case

Masami Wakushima, Takeshi Fujita

1. 主題の設定

若者の就職率は年々高いものとなっており、新規大学卒業者の就職率は平成31年に97.6パーセント、新規高校卒業者の就職率は98.2パーセントとなっている（厚生労働省人材開発統括官）⁽¹⁾。

だが、厚生労働省⁽²⁾の新規高卒就職者の産業別離職状況、平成29年3月卒のデータによれば、179529人の就職者数のうち3年目までの離職者数は70943人である。およそ、39.5%の若者が3年を待たずしてやめている。同時期の大卒の離職者数は458683人の就職者数のうち150543人であり、およそ32.8%である。大卒、高卒ともに離職者の割合は高いものとなっている。

高校三年生で就職活動を行った者に関しては、高校内での進路指導やキャリア教育を通じ進路を決定した者が多くおり、保護者や教員の指導のもと、大卒以上に丁寧に進路を選び取っているはずである。また、若者自身の実力や努力から正規雇用結びついたわけではなく、教員や学校と企業によるコネクションや幾度も教員と面接練習をするなど、他者の力を借りたうえで採用に至っているだろう。もしそうならば、教員と企業の努力で就職させることができたといっても過言ではないのではないかと。

しかし、それにもかかわらず3年未満でやめる者が多いのはどうしてなのだろうか。キャリア教育の必要性や意義の理解は、学校教育の中で高まってき

ており、実践の成果も徐々に上がっている（中央教育審議会答申2011⁽³⁾）。しかしながら、現場で実施されているキャリア教育には、以下のような問題も指摘されている。

一般に、キャリア教育の実施に当たっては、「社会や職業にかかわる様々な現場における体験的な学習活動の機会を設け、それらの体験を通して、子ども・若者に自己と社会の双方についての多様な気づきや発見を得させることが重要である。」とされている。一方で、「従来の教育活動のままでよいと誤解され、「体験活動が重要」という側面のみをとらえて、職場体験活動の実施をもってキャリア教育を行ったものとみなしたりする」ことも指摘されている（中央教育審議会答申2011）。

吉本（2010）は、高校において実施されるインターンシップには、卒業後に無業になってしまう割合を抑制する一定の効果があることを指摘している。しかし、キャリア教育は具体的活動としての職場体験などが断片的かつ単発的に行われることで、そうした圧力が若者を華やかで実現しにくい夢へと駆り立ててしまう危険性もあるともされている（本田2009）。そのため、吉本（2010）はまた、実践的な改革の方向性として、「インターンシップに留まらないキャリア教育・職業教育的な取組を学校の教育課程と組織全体として確立・強化すること」を挙げており、体験的活動にとどまらないキャリア教育の充実が必要であると主張している。

* 日本女子大学大学院2019年3月修了、桜光塾代表

** 日本女子大学人間社会学部教育学科

とはいえ、遠藤他（2019）が主張するように、「多様な進路選択をする生徒を包含する進路多様校においては、生徒の状況に応じたキャリア教育の充実化が、より一層困難」である。その理由は、「生徒たちの進路が多岐にわたるためにすべてに対応するのが難しい」からだけではなく、「進路多様校に通う生徒たちが個々に抱える課題が、しばしば、上位校に通う生徒たちのそれよりも複雑で困難」だからだという（遠藤他 2019）。

そのような状況は日本だけにとどまらない。たとえば、教育困難校のフランスの進路指導においても、進路への教育としての授業の大部分が学校外の職業高校や見習訓練センターやショッピングセンターや工事現場等の企業訪問だという。生徒の進路指導に教員も介入するが、困難校であるがゆえに面談の全てに対応できず、教師の対応は不本意ながらも役割を十分にこなせていない状況であることが指摘されている（京免 2011）。

では、進路多様校に多く在籍しているであろう、困難な環境のもとにあって、複雑な事情を抱えている生徒たちに対しては、どのようなキャリア教育を進めていったらいいのだろうか。その点について考察するためには、彼ら／彼女らが、進路選択においてどのような問題を抱えており、どのような働きかけが必要なのかを見ていく必要があるだろう。そこで、本研究では、困難な家庭環境のもとで育ち、現

在は一般企業で継続して勤務している 20 代女性 1 名⁽⁴⁾を事例として検討し、上記の問いに接近することにする。

2. 研究方法

主題を追求するために、本研究では、以下の方法を用いる。

考察の中心となるデータは、3 年以上初職が続いている若者 1 名（以下 AT と記す）が就職するまでのプロセスに関わった筆者自身のつけてきた記録、同じくそのプロセスに関わった人物に対する聞き取り調査、および、AT に対する聞き取り調査から得られたものである。なお、AT の進路選択のプロセスに筆者以外に関わった人物は、若者支援を目的とした NPO 法人アスリード⁽⁵⁾の共同代表理事である杉野瞳氏⁽⁶⁾と武政祐氏⁽⁷⁾である。

なお、本研究に登場する氏名は、NPO 法人アスリードの代表である武政と杉野、筆者を除き、個人の特定を防ぐため、20 代女性のみ仮名とする。

インタビューの詳細は以下の通りである⁽⁸⁾。なお、インタビューを行った 2021 年はコロナウイルス影響で対面でのインタビューは双方にとってコロナウイルスへ感染する可能性が常に伴うため、zoom を利用し、メールで確認作業を行った。インタビューを行った日時などは以下に示したとおりで

名前	性別	勤務歴	インタビュー調査日時	時間	内容
AT	女性	3 年	2021 年 6 月 13 日（日） 13 時半～14 時 38 分	30 分	中学時代
			2021 年 7 月 4 日（日） 14 時～15 時	60 分	高校時代
			2021 年 10 月 17 日（日） 15 時～16 時	30 分	就職活動での出来事（卒業後、卒業前）

名前	性別	インタビュー調査日時	時間	内容
武政祐 男性		2021 年 6 月 14 日（月）16 時半～17 時半	60 分	当時の振り返り
		2021 年 6 月 28 日（月）14 時半～15 時半	60 分	当時の振り返り
		2021 年 6 月 30 日（水）20 時～22 時	120 分	当時の振り返り
		2021 年 7 月 12 日（月）15 時～16 時	60 分	当時の振り返り
		2021 年 9 月 17 日（金）16 時～17 時	60 分	当時の振り返り

将来の夢を考える⁽⁹⁾

名前 ()

手に入れたい、叶えたい 小さな夢(資格、家族、 留学、旅行でもなんでも。)	家族	住宅	収入
20歳			
25歳			
30歳			
40歳			

できるだけ具体的に書いてください。

ある。

上記のデータを補足するものとして、筆者の経営する桜光塾の生徒を対象に、アンケートを実施した。必ずしも厳しい家庭環境にはない生徒たちの回答傾向と、ATの思考を比較することによって、家庭環境等の影響について検討するためである。アンケートのレイアウトは論文の構成上、変更をしている。

3. 困難な状況にある生徒の進路選択過程

困難な状況にある生徒は、進路選択の過程でどのような問題に直面するのだろうか。そして、それはどのように乗り越えていくことが可能なのか。ここでは、ATの事例を通して、その点について検討していきたい。

(1) ATと出会った当時の家庭環境等の状況

AT(長女)とAN(次女)は実父と実母が唯一同一である。離婚後、ATとANは実母に引き取られるが、ATが小2のときに実母がIT企業に勤めるシステムエンジニアと再婚をする。その後、ATとANに加え、異父兄弟ができる。当時の家族構成は、義父と実母に加え、長女(AT):中3、次女(AN):小6、長男:小3、次男:4歳、三女:3歳で構成されていた。ATが中学生半ばになってから、二番目の父と実母が離婚する。その後、実母はその後年下の男性と知り合い、再再婚する。ATが高校2年の間に実母の三番目の交際相手との間に(ATの全て

のきょうだいをあわせた際の)三男にあたる弟が生まれる。ATとANは、実父は死んだと聞かされており、実父のことは覚えていないという。

続いて、筆者とATが知り合った経緯とともに、ATが当時高校3年生だった頃の家庭環境を見ていこう。

ATが高校3年生のときに、ATの実母に中3の次女であるANの家庭教師を頼まれた。ATの妹であるANには持病があり、持病が重いことから筆者の学習塾までの通塾は困難であると実母から相談をされた。そのため、週に1~2回のペースで高校に合格するまでの約1年間にわたり、家庭教師を引き受けることとなった。

ATの当時の自宅は、5人家族では手狭な2LDKのアパートであった。キッチン、食器棚と食卓テーブルでいっぱい、レトルトの食材等が棚から溢れ、足の踏み場がないくらい状態であった。6畳のリビングには、32V型と思われるTVと2人掛けのソファが置いてあった。また、ペット可の物件ではなかったが、シマリス二匹とうさぎ一匹が飼育されており、ペットのケージもTVと乱立して置かれていた。

2LDKの2部屋は、1部屋がATとANの子ども部屋、1部屋は実母が中心の物置きとして使用されていた。実母と義父は、リビングで寝起きしていたという。

ATとANの子ども部屋も、子ども部屋とは名ばかりであった。ATは高3、ANは中3という受験生であるにも関わらず、試験勉強に使用する一般的な

学習机はなかった。姉妹の洋服を収納する家具もなく、制服はドアにつけたフックにつるされ、クローゼットに入りきらない洋服は衣装ケースに押し込まれていた。教科書類は簡易的な机の下に置かれ、カラーボックスには、高校生向けの参考書と並んで、二重に収納された本に重なるようにATがアルバイト代で購入した小説や漫画がびっしりと入っていた。

他方で、実母は月謝の用意をし忘れることが多々あった。そのようなときには、ATが「月謝の日ですよ。母、すぐ帰ってくると思います。すみません。これでも飲んで待っててください。」と紅茶を淹れてくれ、筆者に詫びながら出してくれた。大きなマグカップに並々とこぼれそうなくらいにたっぷり紅茶を入れ、指導が終わってからも、紅茶が飲み切れず、飲み干すまでATと話すことがあった。

家庭教師で伺った当初は実母が自宅におり、筆者に頻繁に声をかけてきた。しばらくすると、ANとATに机を折り畳み式の机を用意してくれた。しかし、数回が経過すると、ほぼ毎回買い物や仕事等へ出かけており、ATが夕飯の準備をしていることも多くあった。それどころか、当時1歳の三男を置いて出かけ、ATの交際相手が三男の面倒を見ている姿を何度も見かけた。

あるとき、ATに「大学に行かなくていいの?」と聞いたところ、「公務員になりたいんです。(経済的に)安定した。」と話してくれた。筆者はANの指導時にATの机を借りて丸付けをしていたが、夏が過ぎたころにATの机の前には、「いつまでに〇〇へ連絡する」といったメモ書きと奨学金の紙と一緒に貼られていた。当初、筆者がATの奨学金だと思っていたメモは、ANの奨学金の手続きであり、ATが必要書類を両親へ指示していた。さらに、AT自身も専門的な学校に進むため、奨学金を借りる予定であった。

再再婚した義父は、血縁上も繋がりのある息子を溺愛している様子で、狭い部屋にトミカやプラレール等の場所をとるおもちゃが散らばり、おもちゃ箱に収まらず、足の踏み場がないような状態であった。さらに、人懐っこい性格のANには、筆者がダイニングキッチンで指導をしていると、「そんなことはお父さんでも知っているよ。Heだろ。」と英語の授業時にANに話しかけていた。また、義父は

ANの苦手な怖い話をして驚かせる等、冗談を言っている場面も見かけることがあった。しかし、ATとは冗談や他愛のない話をする場面は見かけず、風呂が沸いた、といった業務報告のみであり、それ以外の会話をしている姿を一年間で一度も見かけなかった。

再再婚した義父からは結果として虐待はなかったものの、ATは以前の義父から度重なる虐待を受けていたため、再再婚に反対していた。また虐待を受けるのではという疑念から、家出したこともあったという。

(2) ATについて気になった背景

筆者は、家庭教師をしていたANの姉としてATと出会ったのであるが、ANだけでなく、ATのおかれた状況や進路についても非常に気がかりであった。筆者にそう感じさせたのには、以下のような背景があった。

ATは中学時代、義父から身体的虐待および義父と実母からネグレクトを受けていた。その一方で、義父は家族を養うために父親として稼がなければと強く思っており、仕事には精を出していることが伺える。

私(の家族)は機能不全家族で構成されていて、まず、子どもはまだミルク飲んでいる子(三女)がいるのに、母親が面倒を見ない。父親はもう(家族を養うために)お金を稼がなくちゃってところにだけフォーカスされていて、常に極度に疲れた状態。

中学のときはオール5をとってこないと家にいれさせてもらえないとか。あと(成績が悪いと)ごはん食べさせてもらえないとか。あと、そういうのが嫌で、テスト(点数が低ければ)渡さずに捨ててきちゃうとか。でも、それ(テストの答案用紙を捨てたこと)がばれた日には、顔にあざができるくらい、(義父から)タコ殴りとか。

2021年6月13日(日)

次のインタビューからは、義父の期待に応えようとテスト勉強や家事を必死に頑張るATの姿である。

大体4時に起きて、6時まで勉強して。6時からは(家族全員分の)朝ごはんとお弁当(を用意する)。そのあと、バスタオルとか朝洗わないと夜お風呂で使う(バスタオル)のがなくなっちゃうので(洗濯をする)。そのあと、自分の(学校の)支度して(ようやくAT自身が)ごはん食べて。

2021年6月13日(日)

上記のインタビューのように、身体的虐待のみならず、家事のほとんどをATが担うヤングケアラーのような状況である。AT自身、虐待を受けずとも、日々身体が疲れているはずである。しかし、朝4時に起きて、6時まで勉強する、その後家事を行うという生活を義父と実母が離婚するまではずっと続けていた。そこには、テストで悪い点をとることで義父から暴力を受けたくないというだけでなく、頑張ることで義父にATの存在を認められたいという子どもとしての気持ちも感じられる。

次いで、ATが運動部に入ることを反対されたことを語るインタビューを見てみよう。

美術部に入ったんですけど。本当は剣道部に入りたくて。何かしら入らないと(クラスの友達から)省かれちゃうんで。で、(経済的に)剣道部は無理でも、(経済的に負担の少ない)美術部に。で、剣道着とか高いじゃないですか、5万とか6万とか。それで自分で働いて(高校に入ったら剣道部の部費等)出すか、お金のかからない部活に(入るよう言われた)。

2021年6月13日(日)

ATから、当時の義父の月収は50万円程であったと伺っている。子どもたちの人数は多いものの、高額ではない公立中学校の部費であり、容易に支払えただろう。しかし、ATに家事をしてもらいたいことに加え、運動部に加入することで家計への経済的に負担が大きくなるという理由で、ATが剣道部へ加入することを反対したという。義父と実母はATを子どもではなく、あくまでも「小さな大人」としてみているのではないだろうか。

また、ATは部活に所属しないことによって、クラスで省かれることを気にしている。そこで、剣道部ではなく、経済的に負担の少ない美術部に入り、家事と両立するという、両親が絶対に反対しない妥協案を自ら考え出している。これは、後述する警察

官内定辞退の際に、別の職場で妥協するという、現在のATの職業観にもつながるのではないだろうか。

次の語りは筆者の「誰も助けてくれなかったの?」という問いに対するATの返答である。体育の先生に感謝をする一方、感謝でとどまり、それ以上頼ろうとはしていない。実の祖父母が助けてくれなかったことから、他人を信じないと固く決めた様子が伺える。

女性で、体育の先生で。何か辛いことがあると、その先生が「保健室で休んでいいよ」とか。帰ると(義父に)ばれて大変なので、保健室で午前中の授業休むとか。(義父からの)暴力があった日は寝かせてもらえなかったんで、極度の寝不足の状態。保健室のベッドとか(寝不足で)たまに借りてましたね。(体育の女性の先生には)助けてもらってたなって思いますね。だから、学校はすごい好きで。(家ではなくて)ずっと学校にいてもいいなって思うくらい。

(体育の先生には感謝しているものの)これが今の自分につながっているかっていうと(よくわからない)。一番身近で助けてほしい大人(実の祖父母や親戚)が助けてくれなかったから。自分を助けることができるのは自分しかないという危機感。(例えば)無人島で誰も助けてくれない状況で。声をあげても周りが助けてくれない状況で。ここ(頑張ることを)離れてしまったら、生きていけない。

2021年6月13日(日)

当時の状況をATは無入島にいる状態にたとえている。無人島のたとえからも、他人に頼らず、自力で頑張ることに固執していることがわかる。筆者と出会った当時の高校3年生のATも異常なまでに、例えば熱を出して倒れるまで頑張り過ぎる姿を見受けた。筆者がATの支援をしようと考えた背景には、以上のような厳しい状況があった。

(3) 高校在籍中から、専門的な学校在籍時ににおけるATの就職活動

家庭教師終了後もATが常に気にかかり、筆者の経営する学習塾でのアルバイトに誘うことを決断した。社会の偏差値の高いATを社会科の講師として、採用した。

ATは高校卒業後に警察官になり、いち早く親元から離れ、経済的に安定した生活を営むことを目的に、専門的な学校へ進学した。多額の奨学金を借りて大学に進学し、就職活動に失敗するよりも、公務

員になれる可能性が高いと謳う専門的な学校に魅力を感じたからである。日々公務員試験の勉強に取り組んでいたものの、筆者は卒業生とATの学力を比較し、公務員試験に落ちる可能性のほうが高いのではないかと考えていた。さらに、ATの社会関係資本は、フリーターのような状態の者ばかりで構成されており、筆者の学習塾に勤務する「普通の」大学生が有する社会関係資本とは大幅に異なっていた。筆者は、ATの社会関係資本を再構築でできればと考えた。そこで、筆者の大学時代のインターンシップ先で毎年行われている50人規模の同窓会に参加させることができないかと大学時代の上司や先輩に相談をしたところ、ATも参加できることとなった。インターンシップで親しくしていた杉野と武政にもATが参加することを伝え、事前にATを気にかけていただくよう声かけをした。筆者もATと一緒に参加し、当時の上司らにATを紹介した。中にはATに対し、心無い一言を述べる男性同期も1名いたが、その他は全員、ATの参加を快く受け入れてくれた。おしゃれをして参加したATは「こんな世界があるんですね」と驚いていた。

同窓会を通じて、筆者は武政にATが警察官を目指していることを伝えたところ、警察官の知り合いを紹介してくれることとなった。ATは後日、「警察官としての職務などをざっくばらんに話してもらえたくです。」等と筆者に笑顔で報告をしてくれた。

ATは高校卒業後に専門的な学校に通う傍ら、筆者の学習塾でのアルバイトだけではなく、他のアルバイトも掛け持ちし、学費や生活費の工面をし、通勤のリュックサックの肩紐が壊れても使い続けた。筆者の塾でのアルバイト後は帰宅が23時ごろだが、朝の4時から公務員試験の勉強に勤しんでいたという。試験問題の数学でわからないときには、筆者の配偶者が指導を無料で行うこともあった。

度重なる努力の結果、ATは専門的な学校に在籍中、第二希望の某県内の警察官として無事に内定した。しかし、内定をいただいた後に通っていた教習所内で怪我をし、警察学校への入校が通常よりも数か月遅れてしまった。さらに、ホステスとして働くATの実母が風営法違反で取り締まり対象になってしまった。実母は風営法違反で摘発された後も反省せず、再度同じスナックで働くとATに話したとい、当時ATは筆者の前で泣いていた。

そして、悩んだ末に、警察官になるうえで、多大な迷惑をかけてしまったことから、責任感の強いATは自ら内定を辞退した。高校時代から警察官を目指していたATにとって、大きな挫折であった。

仕方がなく、フリーターとして筆者の経営する学習塾へ戻り、専門的な学校を卒業した後、そこから就職活動を行うことになった。しかし、ATは職歴もなく、何か就職に有利な資格を取得したわけでもない。筆者はATが大学へ進学をして人生を立て直せないかを考えてみたが、現実的に大学入試を突破すること、はたまた奨学金を追加して借りることを総合すると難しいと判断した。ATとも相談をし、やはり大学進学ではなく、就職するという結論に至った。

（4）専門的な学校卒業後におけるATの就職活動

筆者は、ATが警察官の内定を辞退したことを杉野と武政へ報告した。さらに、今後ATはどのように就職活動を行うべきか相談をすると、杉野が面接に同行してくれることを名乗り出てくれた。杉野はATの就職への思いを聞いた後、ATが興味を持ちそうな企業を紹介してくれた。

だが、当時のATには警察官に内定していたという自負があり、中小企業で働くことには、納得がいかない様子を見せることが度々あった。さらに高卒での就職先としては給与も待遇も優れているにも関わらず、「杉野さんに紹介してもらった職場はここです。」とあまり浮かない表情で話していた。ATは段々と冷静さを失い、高時給や歩合制を謳う大手電機販売員をやってみたくと話す時期があった。また、杉野の提案を一応は聞いてみるものの、大手ディスカウントショップの店長候補に応募して採用されそうになる。大手企業であること、給与の高い職場に対するこだわりが強く、杉野の提案を無視して就職先を勝手に探すこともあった。

翻って杉野は、ATが安心して働ける企業を紹介しようと奮闘してくれていた。それでもなお、ATは給与に納得がいかない様子で、杉野の紹介先の社名すら暗記していなかった。筆者だけではどうにもできないと判断し、どうすればATが杉野の紹介する企業を積極的に考えられるかを、杉野と幾度も話し合った。

杉野と話し合った後、ATに筆者から「杉野がAT

の現状を熟慮したうえで、信頼のおける企業を紹介してくれていること」について、繰り返し話した。ATの現在の實力では、杉野の紹介以上の就職先が見つからないことも併せて伝えた。さらに、筆者の経営する塾で雇用している他の大学生アルバイトと異なり、ATには資格や留学経験がないこと、大卒ではないことを再確認するよう促した。加えて、待遇の悪い企業に高い給与で就職できても、来年辞めてはかえって奨学金返済のマイナスになってしまうこと、さらには筆者自身が奨学金の返済をしたときの状況、毎月いくら返済が必要になるかなどを丁寧に話した。さらには、住宅購入や結婚にも奨学金の残高によっては、差し支えがあることを聞かせた。筆者は、ATが納得しなくても諦めず、給与以外の福利厚生や職場の提供する環境がいかに重要であるかを説き、冷静に考えて続けられる就職先を選ぶよう、説得を試みた。

説得する中で、短期ではなく長期で人生を考えられるようになったATは、目先の給与と即採用といった文言に引張られていた大手ディスカウントストアの店長職の内定を途中で辞退した。大手ディスカウントストアの店長職を辞退したのちも、再度流されないようにするため、ハローワークの求人であっても、高卒であれば杉野の紹介以上の職や給与は見当たらないことを何度も繰り返し伝えた。

ATはしぶしぶではあったものの、杉野が紹介してくれた企業へ応募することをほのめかすようになった。企業訪問を行ったのち、ATは見違えるように前向きになり、積極的に紹介された企業を調べるようになった。中小企業だからと懸念することも減っていった。

最終的に、杉野が紹介した、ATを大事にしてくれる中小企業に入社し、営業職として働いている。その初職は現在に至るまで続いており、杉野は度々ATの様子を企業へ伺っている。

(5) ATの就職活動のプロセスから見てきたこと

前項の下線部は、ATが初職に就くまでの期間、指導に困難を感じた部分である。それらの困難を生じさせている要因は、次の3つに整理できるだろう。

第1に、働くことに関する本人の知識や経験の狭

さに起因する困難である。それは具体的には、①名前を知っている大企業以外には興味を持ってなかったり、②分かりやすい短期的な給与の高さのみに注目してしまったり、③福利厚生など、給与以外の労働条件が視野に入らなかったり、④レジ打ち接客など、よく目にする働き方以外は、イメージしにくいために興味をもてなかったり⁽¹⁰⁾、といった形で選択の幅を小さくさせてしまうのである。

第2に、自分自身に関する本人の知識や経験の狭さに起因する困難である。具体的には、①自分自身が就職市場において不利な条件のもとにあることが自覚されていないこと、②奨学金の返済や、住宅購入や結婚など、自分自身の将来にどのようなことが生じるのか、具体的な将来像が抱けていないこと、などがそれにあたる。

第3の要因として挙げられるのは、自分のなかにできあがっている認識枠組みの強固さである。具体的には、繰り返し説得してもなかなか納得には至らず、自分自身のこだわりに基づいて行動してしまうため、粘り強い働きかけが求められることである。

上記の要因のうち、特に最初の2点は、必ずしもATだけに特徴的なことではない。というのは、厳しい環境におかれた生徒の割合が高い定時制高校や教育困難高校に通う、筆者の卒業生たちにも同様の傾向がうかがわれるからである。

当時、ATに伺った内容とほぼ同一のアンケートを、昨年筆者の経営する桜光塾で中2と中3を対象に行い、全生徒分ではないが、31名分回収できていた。ATとは家庭環境などが大きく異なる現在の塾生の回答傾向と、ATの回答傾向を比較することによって、厳しい状況にある生徒たちの状況の一端をうかがうことができると考えたからである。

まず、5年後の将来像を尋ねた設問の回答であるが、桜光塾に通う中学生のなかには、たとえば、イラストレーターのような、才能や運に恵まれないと成功しない夢に対しては、無謀であれば諦めて他企業へ就職活動を行う旨を書いた者がいる。次に、10年後や15年後に関する設問では、家族構成も検討されており、結婚した場合にはどのタイミングで子どもを何人、その子どもにどのような習い事を施すかまで記載している者もあった。さらに、将来の配偶者について求める理想まで想像して書いている者もいた。

一方、ATに際しては、大手ディスカウントショップの店長職といった5年後の給与が変わらない職を選択しようとするなど、5年後までの人生設計ができておらず、いち早く就職できることだけに重きが置かれてしまっていた。10年後や15年後に際しては、イメージできておらず、目先の専門的な学校に進学する際に借りた奨学金を返済することに集中していた。

知念（2018）は、「将来の見通しよりも現状をやり過ごすことに焦点を合わせて職を選択せざるを得ないこと、職探しをするうえで一定期間安定した生活を確保できるかどうか」の重要性を指摘する。ATと筆者の学習塾に通う生徒を比較すると学力以上に家庭環境の異なりが大きい。なぜなら、ATは筆者の営む学習塾の卒業生よりも高い偏差値を有していた科目も複数あったからである。無論、中学生と当時ATは成人していたという年齢差もあるため、一概に比較はできないだろう。しかし、年齢差があっても想像力に差がつくということは、将来の見通しを考える猶予が与えられている者と与えられていない者という差が大きいことが推察される。これらのことから、ATにみられる特徴は、ATだけではなく、厳しい環境にある生徒たちにも共通してみられるものであると考えられるだろう。

では、以上みてきたような指導の困難はどのように乗り越えられていったのだろうか。ここでは、2点指摘したい。1つめは、諦めずに継続した働きかけである。筆者だけではなく、杉野も何度もATに現在ATが置かれている状況を丁寧に繰り返し伝えている。何度も伝えられることで、はじめは社名すら覚えていなかったATが企業を調べるようになり、積極的に就職活動に打ち込むようになっていく。そして、注意すべきことは、やみくもに働きかけたり、単なる説教に終わってしまったりするのではなく、上記の諸要因の解消につながるような働きかけを心がけることだろう。

もう1つは、知識や経験を拡大するような、具体的な出会いである。実際、ATは企業訪問後に前向きに変わっていった。しかしそれは、単なる出会いなのではない。自分がここで働くかもしれないという、自分にとって切実な意味を持つ出会いであったことが効果を持った可能性がある。

6. 結論と考察

本論文では、困難な状況にあるATのような若者が、進路選択においてどのような問題を抱えており、どのような働きかけが必要なのかを検討してきた。ここで得られた知見をまとめるとともに、それらの知見に基づいて、進路多様性に多く在籍しているであろう、困難な環境のもとにあって、複雑な事情を抱えている生徒たちに対して、どのようなキャリア教育を進めていったらいいのか考察したい。

(1) 結論

ATの事例から明らかになった進路選択における問題として、第1に、働くことや自分自身に関する知識や経験の狭さから、自分の進路の選択肢を自ら制限してしまうことが挙げられる。そして第2に、外部からの働きかけを受けたとしても、自分自身の認識枠組みをなかなか変更することができないことが挙げられる。そして、第3に、これらの問題を乗り越えるためには、非常に忍耐強い働きかけが必要であり、自分にとって切実な形での体験が求められるのである。

(2) 考察

これらのことから、今後のキャリア教育のあり方についてどのような示唆が得られるだろうか。

これまで見てきたように、困難な状況にある若者の弱点は、知識や経験の狭さから、目先の利益だけにとらわれてしまい、長い目で人生設計を考えられず、明日や一年先程度のことで精いっぱいになってしまうことである。その結果、衝動的な求職や離職につながり、より一層困難な状況に追い込まれてしまう。

それに加え、衝動的な求職は、家庭環境から逃れることを最優先したい際に迅速に整った生活環境を提供してくれる寮付きの非正規雇用に進路を決めてしまうという形で生じることもある。困難な状況にいる若者自身が条件の悪い就職先を選びたくて選んだとは限らないのである。

これらのことから、第1に、それぞれの生徒がどのような知識や経験を持っているのか、どのような環境の中で過ごしているのかを把握することなしに、一般的なキャリア教育を行ったとしても、期待

される効果が発揮されないと考えられる。生徒の状況に応じたプログラムが必要なのである。

筆者の経営する塾の卒業生で、水商売や短期派遣の仕事に従事する者も一定数おり、将来の見通しがたかない状況である。それらに従事する卒業生によれば、水商売や短期派遣の勤務先では、毎月の月給として給与を支払うのではなく、半額を日払いや週払い、その他の残りを全額月給として渡すという給与の受け渡し方法が多くのお店で行われているという。これは、離職防止対策だけではなく、知的障害や発達障害、もしくは本人の性格上の特性ゆえに計画的に給与を使用できない従業員のための策でもあると思われる。従業員に月給として全額を手渡してしまうと、衝動的に一月分の給与を使ってしまう危険性があるからである。

このように、計画的な人生設計を立てられない者や貯金をするノウハウを持たない者は生活を営む上で困難を強いられるだろう。例えば、本来支払わねばならない保険料や家賃などのまとまった金額の分までを娯楽費等に衝動的に使用してしまい、公共料金やクレジットカードの支払いを何か月も滞納してしまうなど、結果として生活が破綻してしまう可能性が高い。

だが、困難な状況下の若者を責めるにはどのケースも値しない。なぜなら、これまでの生活体験の中で、お金をどのように用いて生活すべきかを伝える機会が今までに用意されていなかったことが推測できるからである。それゆえ第2に、就業体験だけで済ませてしまうキャリア教育ではなく、生徒の状況によっては、生活とお金との関係をしっかり理解できるようなプログラムも求められるだろう。

現在のATは、自分の仕事について全てにおいて満足しているわけでも、全く仕事を辞めたいと思っていないわけでもない。実際、ATが就職してしばらくした後、筆者と筆者の学習塾でアルバイトをしていた共通の知人P⁽¹¹⁾と三人で食事に行った。その際にATは「実は会社でこんなことがあって」とぼつぼつと愚痴を話すことがあった。しかし、Pと筆者はATに対して、辞めるのではなく、冷静になることを執拗に求めた。困難な状況下である若者にこそ、継続的な支援が必要だといえる。このエピソードからは、第3に、卒業後や就職後における追指導の必要性が示唆される。ATは筆者と知り合う

中で、社会関係資本が徐々に構築されていった。だが、本来筆者とATは通常であれば、出会う可能性は極めて低いことが予測される。したがって、公立高校内での追指導としては、人事異動のない校内カフェ⁽¹²⁾が、卒業生の衝動的な離職等を防ぐ重要な役割を果たす可能性があるだろう。

さらには、高卒を新卒として採用する企業においても、若者が置かれている背景を正しく理解することが必要である。困難な状況下の若者を採用する際には、単純に仕事ができる能力だけでは不十分である。企業においても不利益になる、早期の離職を防ぐためにも、給与にとどまらない新入社員の生活を支える支援が求められる。

したがって第4に、キャリア教育を困難な状況下の若者にだけ実施するのではなく、困難な状況下の若者を多く採用する企業への啓発事業として、若者が置かれている状況を事細かに伝える必要がある。そして、企業にとっても負担にならない若者支援はどのように可能か、若者やその家族にすべての責任を押しつけるのではなく、社会的に成長を支援していくことの必要性を周知していく必要があるだろう。

高卒採用を行う企業や学校教員の中には、そのようなことは学校や企業の役目ではないという厳しい意見もあるかもしれない。とりわけ、コロナウイルスに翻弄されるようになった2020年2021年においては、決して少なくない中小企業や個人事業主が、短期的な利益にのみ重点を置き過ぎてしまい、企業や個人事業の社会的な存在意義が危うくなってはいないだろうか。社会を担う次世代を育てることも、企業にとっては大事な存在意義であることを再確認すべきである。

以上のことから、困難な状況におかれている若者たちには、キャリア教育で盛んにおこなわれている、体験的な活動を闇雲に単発で取り入れるのでは最大限の効果を発揮しないといえる。困難な状況下の若者の状況を十分に理解したうえで、必要なプログラムを継続的に実施していくことが必要だと考えられる。彼女ら／彼らにとっては、新たなキャリア教育こそが離職を防ぐ可能性を持っているのであり、残念ながらそれ以外の資源には乏しいのが現実なのだから。

上記のような日々の生活に窮する生徒に向けた

キャリア教育や進路指導の例としては、NPO 法人ブリッジフォースマイル⁽¹³⁾が児童養護施設から出発する若者に向け「巣立ちプロジェクト」を行っている。児童養護施設からいきなり一人で自立を目指すのではなく、高校三年生を対象に、アパートの借り方、一人暮らしの食費や光熱費を授業のように伝える取組である。高等学校におけるキャリア教育も、このような取組を参考にしながら改善していくことが望まれる。

7. 今後の課題

最後に残された課題を述べる。教員の多忙化が社会問題になっている現在、キャリア教育を充実させることが教員の負担をさらに増してしまうことは避けなければならない。根本的な改善策は、教員の定員増や教育予算の増額だろうが、それがなかなか望めないなかでは、学校の外部の資源を利用することが有益だろう。しかし、その点に関連した今後の課題として、第1に、たとえば、外部資源であるNPO法人を頼る教員が一定数各学校に在籍していること、NPO法人側もうまく教員と連携がとれておらず、本来の目指すべき共通の着地点を見失っていることが挙げられる。ともに歩み寄ることが、外部資源を用いたキャリア教育を積極的に活用することにつながるのではないだろうか。キャリア教育について考えるべきなのは、どのような内容を実施するかというコンテンツの問題だけではなく、それを誰がどのように実施するかという方法の問題でもあるのである。

第2にキャリア教育の持続性の問題である。優れたプログラムであれば、持続的に生徒たちを支援してもらいたい、そのためにはやはり資金がないと難しい。しかし、キャリア教育を行うNPO法人で、資金を集めるために、外部へ発信することが得意な団体や支援者が乏しいように見受けられる。人々や企業がNPOのためにお金を出すということは、何千の団体から支援先を選び取ることである。また、ある組織に寄付することは、社会にあるメッセージを送っていることに繋がる。寄付先についてSNSで話題をするたび、メッセージは増幅される(D. カーラン& J. アベル 2013, pp.297-298)

メッセージを増幅させ、組織に寄付を募るために

も、SNSやHPを活用し、自分たちの団体がどのような活動を行ったのか的確に伝える必要がある。寄付が増やせた場合には、生徒にとってより優れたキャリア教育を多岐にわたって複数回行う資源となるだろう。

最後に、本来の目的に立ち返って考えたい。コロナ禍以前から、子ども食堂や校内カフェといった第三の居場所が全国各地に増え、子どもの貧困というワードも一般的になってきた。そのため、校内カフェや子ども食堂といった第三の居場所の利用頻度を高めることは重視されがちだが、単に利用頻度を増やすだけでは不十分である。将来は第三の居場所だけでなく、生徒自身で第一、第二の居場所をも保有できる状態が望ましい。そのためにも、校内カフェによる物資提供のみではなく、そこから生徒の自立を促すキャリア教育との連携が不可欠だといえるだろう。

(注)

- (1) <https://www.mhlw.go.jp/content/11801000/000548637.pdf> 2021年10月8日
- (2) <https://www.mhlw.go.jp/content/11652000/000689481.pdf> 2021年10月8日
- (3) https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/giji/_icsFiles/afiedfile/2011/02/22/1302048_1.pdf 2021年10月8日
- (4) 筆者の営む学習塾で雇用していた学生であり、筆者が就職活動を手伝った経緯がある。神奈川県立の普通科の高校を卒業している。
- (5) 中高生向けのキャリア教育支援とキャリア教育冊子の発行等を手掛ける。
- (6) 高校卒業後、大手通信企業に就職し、2年後に社内制度を活用して大学に進学。第三セクターでの就労経験を経て、中高生のキャリア教育支援を手掛ける民間企業（武政と同一企業）へ入社。2019年、武政と共同代表でNPO法人アスリードを立ち上げる。
- (7) 大学卒業後、大手企業へ就職。第三セクターでの就労経験を経て、中高生のキャリア教育支援を手掛ける民間企業（杉野と同一企業）へ入社。2019年、杉野と共同代表でNPO法人アスリードを立ち上げる。
- (8) それぞれの対象者には、論文に記述された内

容の掲載について許可をいただいた。

- (9) 筆者が桜光塾の生徒に行ったアンケートのレイアウトを一部修正したものである。実際には生徒が記入しやすいよう、A4の用紙で行っている。
- (10) 村上・小泉(2019)が行ったSELでは、生徒にとって身近なアルバイトに関する教材に関しては興味を示したが、具体的でない者や現実的に生徒が想像できなかった教材に関しては興味を示さなかったという。
- (11) 筆者の営む学習塾で大学3年から4年まで働いていた。
- (12) 支援事業として企業やNPO法人らが県や市から委託を受けて行っている事業である。高橋(2017)は、その後の校内カフェは、大阪府から全国規模へと広がりつつあると述べる。大阪府と並び、神奈川県立田奈高校では大阪府立西成高校を模倣してはじまった「ぴっかりカフェ」があり、「となりカフェ」と並んで全国的に著名である。また川崎市では、川崎市立川崎高校定時制で「ぼちっとカフェ」が、2014年10月に川崎市の福祉対策の一環で始まり、2016年からは市教育委員会の「生徒自立支援業務委託事業」となった(高橋2017)。
- (13) <https://www.b4s.jp/activity/sudachi/2021年10月8日>

〈引用・参考文献〉

- 知念渉(2018)『<ヤンチャな子>らのエスノグラフィー ヤンキーの生活世界を描き出す』, 青弓社
- D・カーラン&J・アベル(2015)『善意で貧困はなくせるのか? 貧乏人の行動経済学』(澤田康幸訳) みすず書房
- 遠藤野ゆり・酒井理(2019)「進路多様校における主体的なキャリア選択に向けたキャリア教育—地方都市のある私立高校の教育モデルの検討とその教育効果の評価—」『生涯学習とキャリアデザイン』法政大学キャリアデザイン学会, pp.159-172
- 本田由紀(2014)『社会を結びなおす 教育・仕事・家族の連携へ』, ちくま新書
- 本田由紀(2009)『教育の職業的意義—若者、学校、社会をつなぐ』, ちくま新書
- 乾彰夫(2006)『不安定を生きる若者たち日英比較フリーター・ニート・失業』, 大月書店
- 乾彰夫・東京都立大学(2006)「高卒者の進路動向に関する調査」グループ『18歳の今を生き抜く 高卒1年目の選択』, 青木書店
- 岩澤一美・杉林淳子(2016)「自閉症スペクトラム(ASD)の不登校児者の居場所—当事者の著作から探る—」共生科学, 第7巻, pp.59-67
- 片山悠樹(2016)『「ものづくり」と職業教育 工業高校と仕事のつながり方』, 岩波書店
- 古賀倫嗣「コミュニケーション能力の育成とキャリア教育の取組み—熊本県立Y高等学校定時制課程における実践から—」日本生活体験学習学会誌, 第15号, pp.29-38
- 小泉令三・村上敏之「定時制高校生対象の「キャリア発達のための社会性と情動の学習(SEL-8Career)プログラム」の開発と試行」福岡教育大学大学院教職実践専攻年報, 第9号, pp.123-130
- 京免徹雄(2011)「フランスの進路指導における教員と相談員の連携—リヨン郊外の教育困難校を事例として—」キャリア教育研究30号, pp.15-23
- 杉田真衣(2015)『高卒女性の12年不安定な労働、ゆるやかなつながり』, 大月書店
- 高橋寛人(2017)「横浜市立横浜総合高校(定時制3部制単位制高校)におけるカフェ相談活動の取り組みと意義」, 横浜市立大学, 平成28年度教員地域貢献活動支援事業(インキュベーション型)報告書
- 宇都宮真輝(2021)「定時制高校のキャリア教育における構成的グループエンカウンター活用の試み」吉備国際大学研究紀要(人文・社会科学系)第31号, pp.137-146
- 吉本圭一(2010)「インターンシップの評価枠組みに関する研究: 高校における無業抑制効果に焦点をあてて」インターンシップ研究年報13巻, pp.19-27

